

関根道和富山大准教授



社会的、経済的格差が1980年代から日本で拡大し、健康への悪影響も指摘されているが、その影響は大人だけでなく、子どもたちにも及び、格差が次世代に継承される連鎖が生じている。こうした傾向を富山県内の中学生約1万人の調査で関根道和富山大准教授（保健医学）らが確かめた。7月に名古屋市で開かれた日本学術会議・日本睡眠学会共催のシンポジウムで報告した。

22 10 3

中学生1万人追跡調査

ひとり親世帯の子どものは、朝食抜きや頭痛が多かった。友達や先生らとのきずなを強めれば、格差の連鎖から子どもを守る可能性も示した。格差対策のヒントになりそうだ。

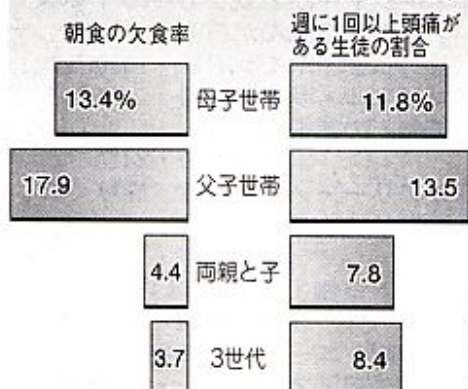
子どもの貧困

日本の子どもの相対的貧困率（所得の中央値の半分に満たない割合）は経済協力開発機構（OECD）の平均より高い。特に、ひとり親世帯の子どもの相対的貧困率は各国に比べて日本の58%が飛び抜けて高く、先進国の中で日本の子どもが格差が最も大きいことがOECDの2009年のまとめで分かっている。

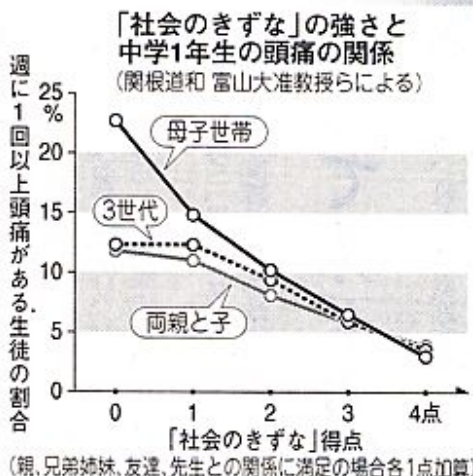
研究グループは1989（平成元）年に富山県で生まれた子ども1万人について16年間、心身の発達状態を詳しく調べた。「富山ス

子どもの健康にも格差

中学1年生の世帯構成別生活習慣と健康



（関根道和 富山大准教授らによる）



きずな強めれば改善できる

と、はつきり多かった。週に1回以上の頭痛がある割合も、父子家庭や母子家庭で高く、ひとり親世帯の子どもの健康状態が悪いことがうかがえた。

子どもの時に肥満だと、成人してから生活習慣病になりやすい。今回の調査で中学1年生の肥満率は父子家庭が21%と最も高く、母子家庭17%、3世代同居で16%、両親と子どもの家庭で13%で、ひとり親世帯の子どもに肥満が目立った。

「タイ」と呼ばれる「子どもの長期追跡調査」で、今回は02年に集めた中学1年生のデータから解析した。

肥満や頭痛多い

ひとり親世帯ほど生活面で不利があった。夜更かしや朝食抜きの中学生は、父子家庭や母子家庭が、両親と暮らす中学生と比べると、はつきり多かった。週に1回以上の頭痛がある割合も、父子家庭や母子家庭で高く、ひとり親世帯の子どもの健康状態が悪いことがうかがえた。

このほか、主観的健康感などの指標でも、ひとり親世帯の中学生の健康度は低い傾向にあった。

関根准教授は「ひとり親世帯の子どもの教育機会、健康面などさまざまな領域で不利な状況にある。積極的な対策と支援が必要だ」と提言した。

関根准教授は「ひとり親世帯という社会的不利がある場合でも、きずなを強めれば、マイナスの健康影響を減らせる可能性がある。かつて家庭の果たしていた機能を家庭が担えなくなっ

地域や学校の役割
地域や学校での対策の手掛かりになるキーワードは「きずな」だった。今回の調査では、①親②兄弟姉妹③友達④学校の先生との関係に満足している場合を各1点として加算し、0～4点を「社会のきずな」得点と設定した。

この得点と週1回以上の頭痛の関係調べた。親や兄弟姉妹、友達、先生との関係が良好なほど頭痛やこれらの頻度が低かった。母子家庭の子どもも、社会的なきずなが多くて満点の4点に近いほど、ほかの世帯構成の子どもと比べて、頭痛の頻度に差がなかった。

関根准教授は「ひとり親世帯という社会的不利がある場合でも、きずなを強めれば、マイナスの健康影響を減らせる可能性がある。かつて家庭の果たしていた機能を家庭が担えなくなっ

現在、地域や学校の役割は大きい」と話している。